

2016年9月25日(日)朝10:10～  
9月第4公同主日礼拝式説教

聖霊降臨節第20、敬老祝会等  
日本アライアンス庄原基督教会

## 説教題： **戦闘教会—144,000人**

聖書:ヨハネの黙示録 7章1～8節

＜口語訳＞

新約聖書393頁

ヨハネの黙示録 7章1～8節

＜新共同訳＞

新約聖書460頁

ヨハネの黙示録 7章1～8節

＜新改訳第3版＞

新約聖書484頁

ヨハネの黙示7章1～8節＜塚本訳＞

新約聖書792～793頁

主題:主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による  
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、  
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◇ヨハネ黙示録1章では、神の御子イエス・キリスト様の再臨信仰を持って生きるキリスト者への励ましのことばと黙示の神の御子イエス・キリスト様の愛の思いが啓示され、2章1～3章22節は、エペソ教会ほか7つのアジアの教会への手紙で、4章1～11節は、「天の玉座・御座」の前での4つの生き物と24人の長老の讚美、5章1～14節は、「天の玉座・御座の父なる神の右手にある封印の巻物」を開封でき、その「巻物」を受取る屠られた仔羊(羔羊)礼拝と天の大讚美描写、6章1～8節は、「さばきの巻物」第1～4巻封印、9～11節は、第5巻の封印、12～17節は、第6巻の封印の開封箇所です。
- ◇ヨハネの黙示録7章1～8節は、挿入箇所。

本論；

◇本日、ヨハネ黙示録第7章1～8節から主の使信に思い・心をとめます。

◆黙示録7章1～2節；ヨハネは、巻物の封印を解く間に神の御使いたちが神と小羊の怒りとどめる労苦をする姿を見せられました。

◇1～8節；塚本訳◆十四万四千人印せらる一戦闘の教会

「1 この後で四人の御使いが地の四隅に立って地の四方の風を引き留め、風が地の上に、また海の上に、また一切の樹々の上に吹かないようにしているのを私は見た。

2 また私はもう一人(他)の御使いが、活ける神の玉璽(しるし)を(手に)持って太陽の出る方から上(って来)るのを見た。彼は地と海(と樹々)とを害うことを許された四人の御使いに大声で叫んで」と、ヨハネは主の御使いの天での働きを啓示されました。

◇1～2節；「四人の御使いが地の四隅に立って地の四方の風を引き留め、風が地の上に、また海の上に、また一切の樹々の上に

吹かないようにし」、「もう一人(他)の御使いが、活ける神の玉璽(しるし)を(手に)持って太陽の出る方から上(って来)るのを見た。彼は地と海(と樹々)とを害うことを許された四人の御使いに大声で叫んでいた」のです。

⇒「地の四方の風を引き留めるため、地の四隅に立つ四人の御使い」の「地と海(と樹々)とを害うこと」をとどめる「もう一人(他)の御使いの大声」が「四人の御使い」に向けられます。

⇒「この天での御使いたちの働き」は、「今地上にある私たちが害さないように」、「四人の御使いが地の四方の害を与える風を引き留めるよう命じるもう一人の御使い」によって、「守られて」いるのです。

⇒戦争、内戦、飢饉、死、地震、天変地異を回避することは困難な時代ですが、もっと厳しい大患難を御使いたちは、懸命に防いでいてくれるのです、通常、肉眼で見ることはできませんが。

⇒「戦争、内戦、飢饉、死、地震、天変地異」の回避とともに、「もっと厳しい大患難」から守られるように祈りたいと願います。

◆ 黙示録7章3～4節 ; ヨハネは、神の御使いたちが144,000人の額に神の印を押されるのを見せられました。

◇ 1～8節 ; 塚本訳 ◆ 十四万四千人印せらる  
— 戦闘の教会

「3 言うた、「私達が神の(玉璽<sup>しるし</sup>)でその)僕達の額に印をつけ(終わ)るまでは、地をも海をも樹々をも害うな！」

4 すると(間もなく)私は印をつけられた者の数を聞いた。(曰く)——イスラエルのあらゆる種族の子達の中から印をつけられた者が(総計)十四万四千」と、ヨハネは主の御使いが144,000人の額に神の印を押すのを見られました。

◇ 3～4節 ; 「神の(玉璽<sup>しるし</sup>)でその)僕達の額に印をつけ(終わ)るまでは」、「地をも海をも樹々をも害わない」ように、「地をも海をも樹々をも害う」、「地の四方の害を与える風を引き留めている四人の御使い」に、「もう一人(他の御使い)」が、命じ、「(総計)十四万四千人の額」に、「神の印」が、つけられたのです。

⇒ 「(総計)十四万四千人」を、どう理解するか？

⇒**OS師**は、4つの立場を示し、4番目の立場を選択しておられます。

1. イスラエル12部族、
2. イスラエルのクリスチャン、
3. 霊的イスラエル＝全クリスチャン、
4. 「(総計)十四万四千人」も、「**イスラエルのあらゆる種族の子達**」も、象徴のことばと、理解する＝全時代を通じての「**神の民**」、「**全クリスチャン**」、「**霊的イスラエル**」です。

⇒「**十四万四千**」は、原語ギリシヤ語で、「**一百四十四千**」(ἑκατὸν τεσσαράκοντα τέσσαρες χιλιάδες)で、「**一百四十四**」は、「**12×12**」、「**12**」は、「**3×4**」で、「**3**」は「**3位一体**」、「**4**」、「**東西南北**」＝「**地の四隅**」で、「**全世界**」を象徴しているので、「**神が全世界に働きかける**」を意味している、という理解を、**OS師**は提案しておられます。

⇒「**十二**」を「**旧約の選民**」と「**新約の選民**」を象徴する、と理解すると、「**全時代を通じてのクリスチャン**」との立場をとれるというものです。

⇒「**印**」は、**所有、品質保証、危害回避**の印です。

◆ 黙示録7章5～8節 ; ヨハネは、**神の印**が押された144,000人の内訳を提示されるのを見せられました。

◇ 1～8節 ; 塚本訳 ◆ **十四万四千人印せらる— 戦闘の教会**

「5 (まずユダ族から始めるならば——)ユダ族から一万二千印をつけられ、ルベン族から一万二千、ガド族から一万二千、

6 アセル族から一万二千、ネフタリム族から一万二千、マナセ族から一万二千、

7 シメオン族から一万二千、レビ族から一万二千、イッサカル族から一万二千、

8 ザブロン族から一万二千、ヨセフ族から一万二千、ベニヤミン族から一万二千印をつけられた」と、ヨハネは144,000人の内訳を見られました。

◇ 3～4節 ; 「一万二千」が繰り返され、「十二回」=「十二部族」であることが示されています。

⇒「(総計)十四万四千人」は、「十二」の異なる性質を与えられた**部族**で、「ヤコブ」を同じ**祖先・父祖**としています。

⇒「**教会**」も、「**神の仔羊(羔羊)**」から誕生しました。

- ⇒「ユダ族」(犠牲的精神)、「ルベン族」(反省と悔い改め)、「ガド族」(勇気と忠誠)など、多彩な固有の歴史をもっていて、統一の神に繋がっているのです。
- ⇒教会も、日本、アメリカ、インドと、「神の仔羊(羔羊)」から誕生した本質は、同じでも、画一的な規格品ではありません。
- ⇒「一万二千」の部族・教会は、「百花園」のように、各自の個性、能力を発揮し合って、「教会」、「神の国」を展開しています。
- ⇒「一万二千」も原語ギリシヤ語では、「十二千」(δώδεκα χιλιάδες)で、「十四万四千・一百四十四千」同様、「神が全世界に働きかける」を意味しています。
- ⇒「塚本記」がこの箇所全体の題とする「戦闘の教会」の姿です(ピリピ1:27~30)。
- ⇒ヨハネは、「(総計)十四万四千人」、「一万二千人」の部族・教会が、「神の印を額」に受け、「神が全世界に働きかける」「戦闘の教会」として働きつづけているのを見ました。
- ⇒ヨハネは、「四人の御使い」、「もう一人(他)の御使い」の守りの中で生きる教会を見ました。

## 結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◇ヨハネ黙示録1章では、神の御子イエス・キリスト様の再臨信仰を持って生きるキリスト者への励ましのことばと黙示の神の御子イエス・キリスト様の愛の思いが啓示され、2章1～3章22節は、エペソ教会ほか7つのアジアの教会への手紙で、4章1～11節は、「天の玉座・御座」の前での4つの生き物と24人の長老の讃美、5章1～14節は、「天の玉座・御座の父なる神の右手にある封印の巻物」を開封でき、その「巻物」を受取る屠られた仔羊(羔羊)礼拝と天の大讃美描写、6章1～8節は、「さばきの巻物」第1～4巻封印、9～11節は、第5巻の封印、12～17節は、第6巻の封印の開封箇所です。

◇ヨハネの黙示録7章1～8節は、挿入箇所です。

⇒第1巻は、白馬で、「戦争」、第2巻は、赤馬で「内乱・内戦」、第3巻は、黒馬で「飢饉」、第4巻は、青ざめた馬で「死」によるさばき宣告でした。

⇒これらの**神の終末のさばき**は、すでに地上で起こっていることではありますが、ヨハネの黙示録は、「戦争、内戦、飢饉、死」は、**神のさばき**であるとの認識を喚起しているのです。

⇒第5巻の封印開封は、「祭壇の下の殉教者」を、ヨハネに見せて下さる出来事であり、彼らの叫びは、「**神の復讐**」を求めるものでした。

⇒ヨハネも、私たち、地上の教会に属する者たち、聖書を**神のことばと信じる者たち**は、「復讐」は、**神のなさること**と信じています。

⇒第6巻の封印開封は、地震、黒い太陽、血の月、天の星落下という**天変地異**でした。

⇒「**地(上)の王、貴人、将軍、富豪、権力者、また凡ての奴隷、自由人は(みな恐れて)**」、「**洞穴や山の岩の間に身を隠し**」、「**自己保身**」に向かったのです。

- ⇒「**第7巻の封印開封**」(ヨハネの黙示録8章)前に、ヨハネの黙示録7:1～8で、「**神の印を押された(総計)十四万四千人・一万二千人の12部族・霊的イスラエル**」の姿を見ました。
- ⇒「**第7巻の封印開封**」の後におとずれる「**神が与えて下さる新天新地**」へと繋がる「**神の国**」の姿であり、天でも、地上でも、「**戦闘の教会**」として、「**神が全世界に働きかける**」神の民として生かされているのです。
- ⇒**神の仔羊(羔羊)**は、「(総計)十四万四千人・一万二千人の12部族・教会」に、EY師が提示された「**神の真実**」、「**神からの霊の賜物**」、「**今あるは神の恵み**」という神の能力が与えられて、「**神の国**」をあかしする原動力となっています。
- ⇒**神**は、「**地の四方の害を与える風を引き留めている四人の御使い**」と「**地をも海をも樹々をも害う四人の御使いに**」、「**神の(玉璽(しるし)でその)僕達の額に印をつけ(終わ)るまでは害を与えると大声で叫ぶもう一人の御使い**」に守られ、「**霊的イスラエル・戦闘の教会**」として、**神礼拝**に与っていることを喜びましょう。